

◆ 「文化」の追求が

文学部独自の SDGs 理解に繋がる

学生の関心度が高まっている SDGs 教育

私の研究領域は大きく2つあります。青少年教育・ユースワークで若者の居場所と参加をテーマとしていて、もうひとつはESD・開発教育・SDGsに関係した研究です。今日はまず、大学におけるSDGs教育はどのようなことをすればよいのか、次に今の若い人がSDGsをどのように捉えているかということ、それから今度、文学部でSDGsコースが導入される場合のヒントになるようなことをお話させていただきます。

まず大学におけるSDGs教育について、私が上智大学で実施してきたことを紹介させていただきます。上智では「教育イノベーション・プログラム」というものがあり、新しい試みに対して補助金をつけてくれて、授業を開設することができます。2014年度から「多文化共生社会とESD・市民教育」という授業を2単位で3年間開設し、「講義型および参加型によるESD・市民教育の試み」という研究を3年やってまいりました。前段階として2012年度から教育学科のスタッフが月1回ペースで勉強会を開き、『多文化共生社会におけるESD・市民教育』（上智出版）としてまとめ、これをテキストにして論講形式で授業を開きました。私が、多文化共生や地球温暖化について考えるワークショップを開いた他、「紛争後の社会」、「多文化主義」、「人の国際移動と多文化社会の教育変容」、「子どもの貧困」、「グローバル化時代のシティズンシップと教育」、「総合的な学習とESD・市民教育」など、教育学科の先生方が多様なテーマで講義します。最後にまた私が「グローバル社会の中の私」というテーマでワークショップを行いました。学科の定員が60名なのでせいぜい100人くらいの受講かと思っていたら、190人も集まる人気講座となり、上智の学生新聞にも「上智一受けたい授業」として紹介されました。

学びのプロセスを進めるには外との関りが重要

授業効果を測定するために、14回の授業でどれだけ態度や知識、意識が変化したかを授業の初回と最終回にワークシートを配布して測定しました。「態度の変化」については、「あなたが大事にしたいものは何ですか」ということで、収入・健康・家族・友人・地域や社会への貢献・仕事・社会的に認められること・趣味・その他、この9項目で自分が大切にしている価値項目を序列化してもらいました。授業の期待としては、「地域や社会への貢献」が増えることを期待したのですが、全く増えませんでした。上位3位に入ったのは、「家族」「健康」「友人」で、それ以外の例えば「仕事」「社会に認められる」「趣味」「地域の貢献」

は 10%以下でした。半期の授業では、態度の変容を促すほどの大きなインパクトはないことが分かりました。

議論になったのは、20 歳前後の若い人が 1 位に大体「家族」か「健康」を挙げていたことです。40 代ぐらいだったら分かるのですが、若いのですからもっと仕事を頑張りたいとか、社会的に認められたいとか、場合によっては趣味のほうに行きたいということであって、もよいと思うのですが。昭和の時代であれば「仕事」や「収入」、あるいは「社会に認められたい」がもっと多かったと思いますから、随分意識が変わってきたと思います。

次に「知識」ですが、14 年度と 15 年度、ウェビングという手法で調べました。「多文化共生」をテーマにブレインストーミングをしてもらい、思いつくものを挙げてもらうことを、1 回目の授業と最終回の授業で、10 分間の時間を与えて書いてもらいました。知識量が増えているかと思うと、事前よりも事後の方が 6 項目減っています。ただこれは減った代わりに構造化されているということです。1 回目では例えば国名をラオスとか、ベトナムとか、タイとか、アメリカを上げたり、料理などが思いつくままに上がっているんですけども、構造化はされていません。一方で最後のほうになると、グローバル化とかシティズンシップとか、異文化理解とか、結構まとまってきていることが分かります。また教員が授業内で語ったキーワードがどれだけ上がっているかということも調べたのですが、事後において顕著に増加したのは ESD、市民教育、そして多文化主義や多文化教育が上がってきました。これらの項目が顕著に増加していることから、知識は構造化され、また教員が教えたことは覚えてくれているということが分かりました。

続いて「意識の変化」です。2015 年度にアンケート調査をしました。調査項目がメディア接触、それから在住外国人について、貧困・戦争について、地球温暖化について、選挙や地域への参加について。また新聞で海外の記事を読むとか、テレビで放送されている海外のニュースに関心があるかとか。多文化に関する項目ですと、将来外国で学びたいとか、外国に住みたいとか、私の家の近所に外国人が多く住むことにストレスを感じるとか、国際結婚してもいいとか、このような項目でアンケートしました。

事前・事後評価を比較しましたが、結果的には外国に行きたいとか、定住外国人の項目ではむしろ低下しています。要するに必ずしも外国に行きたいとは思わなくなってしまい、こちらの狙っていることとむしろ逆の結果が出たのです。ただ教員の中には、多文化の紛争地域で戦争したボスニア・ヘルツェゴビナについて話す人もいましたし、いかに多文化で共生するのは大変であるかというのが逆に分かったのではないかと考えられます。事前では気軽に外国人と一緒に暮らせると考えていたのが、ちょっと躊躇するようになったということで、これは必ずしもネガティブな変化ではないのではないかと考えています。

学びのプロセスを進めるには外との関りが重要

上智での ESD の講義のなかから、ESD の学びのプロセスには 4 段階あるのではない

かという仮説を考えました。第1段階は、問題に対して知識も関心も薄い、要するにまっさらな状況です。第2段階が基礎的な知識を得て、関心を持つようになり、ときには単純な行動を起こす段階です。たとえば地球温暖化の話聞いて「節約しましょう」「リサイクルしましょう」という段階です。第3段階が、問題の複雑性の理解です。多文化共生を例にとると「外国人と一緒に暮らすのは大変だな」とか、地球温暖化の問題も「少し節約すれば済むレベルの話ではないな」とか。問題の複雑性を理解すると、具体的な行動はとりにくくなり、モチベーションも下がりますが、関心は持ち続けるというのが第3段階です。第4段階は、問題の複雑性を理解した上で自分なりの解決策や、行動方針を見出すことができる段階です。教育的にはこの第4段階を目指しているわけですが、我々が行なったESDの授業では、少なくとも第2段階にあった人たちが、第3段階までに持っていくことには成功したと評価しています。

そうなると問題は3から4に到達するにはどうすればよいのか、ということです。2から3に行く段階では、今回参加体験型の学習、ワークショップを4回行っていましたが、これはとても有効でした。ただ半期では第4段階まで行くのは難しい。この先を考えると、社会とのつながりが大事で、フィールドワークやアクションリサーチ、スタディーツアーなどが求められます。大学の中にいただけでは難しいのではないかと考えています。参加体験型の授業ももちろん有効ですが、シミュレーションは疑似的な体験でしかありません。立教は豊島区とタイアップしていますので、豊島区のいろいろな事業に参加する、ボランティア活動する、あるいは海外体験する、そういった外の世界との関りが、3段階から4段階に行く上で大切ではないかと考えています。

若い世代はSDGsをどのように捉えているのか

次に若い人たちがSDGsをどういうふう認識しているかについてお話します。国連Weeksなど、いろいろなセミナーやシンポジウムを上智でも立教でもやっていますが、大体自分のところの学生はあまり参加しないのですよね。学生はサークルやデートで忙しいですし、大学の授業もあるからわざわざセミナーに来ないのです。そうすると、参加してくるのは高校生なのです。セミナーの参加者の半分ぐらいは高校生ということもあります。

高校生はSDGsをどう捉えているかですが、彼らなりに入試や就活に絶対必要だと思っています。そういう感覚はすごく早い。それが半分です。あと半分はSDGsに関心が高い層です。未来への危機感といいますか、やはり若い人ほど高いと思います。グレタさんだって2100年には97歳。今の学生が20歳としたら、ちょうど2100年で100歳ですよ。人生100年の時代ですから、2100年に気温が1.5度以内の上昇で終わるのか、4度上がってしまうのかは死活問題です。危機感というのは若い人ほどあるのではないかと感じています。

2022年度からは高校で新しい指導要領が始まります。新指導要領には、「教育の目的は持続可能な社会の担い手をつくる」という前文が入ったのです。これは教育的には

とても大きなことで、教育基本法以来、実に 70 年ぶりに育てるべき人間像が明らかにされました。従って理科・社会・家庭科・英語などの教科も、「総合」や「探究」という領域も SDGs ベースでつくられていると言ってもよいくらいなのです。

社会科は当然 SDGs に関係ある貧困問題や、まちづくりを扱います。生産と消費は家庭科です。消費者教育も 2022 年度から 18 歳成人で契約の主体者になれますので、家庭科の中で消費者教育を行いますし、エシカル消費という地球環境を考えた賢い消費者になることも教えられます。理科は当然、地球環境や生態系に関わります。それから英語などの語学ですが、多文化共生の問題、国際協力、そういったことが英語の教材レベルで出てきます。つまり SDGs ベースで今の小中高の教育が始まっていると言えます。

また高校では「探求」という時間ができました。高校 1 年か 2 年で、1 年かけてやるのですが、グループないし個人でテーマを設定し、そのテーマを 1 年間追求してくという授業になります。探究のテーマはほぼ SDGs と考えてよいです。SDGs と探求についてはすでに教材、参考書がたくさん出ています。つまり小学校では今年から SDGs を教えていますし、中学校もこの 4 月から教えますし、高校でも前倒しで今からすでに SDGs を取り上げているところです。

文学部として大切にすべき「文化」の項目

SDGs では、とにかく 17 目標の理解に捉われてしまいがちですが、理念に立ち返って考えることが大事です。SDGs の決議文、いわゆる「2030 アジェンダ」にも主に 3 つの理念が書かれています。共生、公正、循環、この 3 つの理念が大切です。「共生」ではジェンダーや多文化共生、移民問題、先住民族というようなテーマになります。「公正」は貧困問題、貧富の格差、開発途上国の問題。「循環」では気候変動、生物多様性、生産と消費などの環境系のテーマになります。

ですから文学部で SDGs のコースをつくるのであれば、この 3 つの理念をカバーすることが大事になってきます。「共生」はジェンダー、多文化、移民、先住民族など、文学部的には中心的なテーマですから、ここは楽勝と思います。「公正」をどう教えるかという点、社会学系の人なら得意でしょう。「循環」は理系が得意ですね。文学部の現員でできないことについては非常勤や、他学部の授業を組み入れるなどの工夫が必要ではないかと思えます。

また 17 の目標には文化は含まれていませんが、実はとても大事です。私は 18 番目の目標は文化だと思っているほどです。多様であることというのは数値化が難しいので 17 の目標には含まれていませんが、文化というのは公正や循環と必ず関わってくる問題です。たとえば生物多様性で違法な伐採、野生生物の減少といっても、文化的にその生物を食している場合も多々あるわけです。日本ですとクジラがそうですね。クジラは文化的に言えば西洋人の人たちは「捕るなんて許せない」というわけですが、日本は歴史的に捕ってきた理由があります。その文化摩擦は今でもあるわけです。あるいは貧困の問題とも関わっています。

象牙の密猟とかいろいろあり、それを取り締まれと言うのは簡単ですが、では取り締まったらその人たちはどうやって生きていけばいいのか、ということは常に考えねばなりません。文化あるいは生活様式と、公正、循環は必ず関わってきますから、このあたりは文学部として強調できる点ではないかなと思います。

文化は 17 の目標には含まれていませんが、先ほど言った 2030 年アジェンダでは強調されています。36 項目に、「我々は、文化間の理解、寛容、相互尊重、グローバル・シチズンシップとしての倫理、共同の責任を促進することを約束する。我々は、世界の自然と文化の多様性を認め、すべての文化・文明は持続可能な開発に貢献するばかりでなく、重要な成功への鍵であると認識する」ということで、文化と生物の多様性の重要性を述べています。文化は軽視されがちですが、文学部としては大事にしていく必要があります。文化は、共生はもちろんのこと、公正や循環にも深く関わりますので、そのあたりを追求していくことが、文学部特有で独自性を出した SDGs 理解になるのではないかと私は思っています。

社会参加のスキルを

次にカリキュラムですが、先ほど言った第 3 段階から第 4 段階に行くよう、現場を訪れたり、スタディーツアーをしたり、フィールドワークを行いたいところです。しかし従来の大学教育では、4 年生の前半は就活に、後半は卒論に時間を取られてしまいます。私の中では、3 年で基礎的な知識を身につけて、4 年で学外と連携してフィールドワーク、5 年で修士論文というのが理想のカリキュラムです。らせん型のイメージで、3 年、4 年、5 年と少しずつ高みに向かって、最後は修士論文や発表、パフォーマンスなどに着地するカリキュラムがよいのではないかと考えます。ここは各ゼミや先生方のテーマによって変わってくるでしょう。いずれにしても 3 年かけて、フィールドワークやアクションリサーチを入れて、外部と繋がりがながら授業ができれば、コースとしては非常におもしろい組み立てができるのではないのでしょうか。

新しいコースでは修論を軽めにするということですが、その代わりに何を学生に身につけさせるかが問われます。私はスキルが大切と思います。私のゼミでは、フィールドワークができなかった代わりに、ゼミ生全員にファシリテーションの技術を身につけて卒業させてきました。ゼミや合宿でワークショップを採用して、そのファシリテーターを一度は経験してもらっていました。この技術は社会に出た後から教育の現場でも企業でも必ず役に立つからです。SDGs ですので社会参加に関わる何らかのスキルを身につけさせることを考えてもよいかなと思います。

大学ですから、SDGs を鵜呑みにするのではなく、批判的な検討をすることも大事だと思います。ビジネス的な課題と、グローバルな社会課題というのは時としてぶつかる時もあります。公正という観点からいうと、貧富の格差を縮めるとか、ジェンダーでも制度的にいろいろなものを保障していくと「画一化」の方向に向かってしまいます。そうなると画一化

の方向性と、文化の多様性や生物の多様性というのは相入れない部分も出てきてしまうのですが、それでも両方追求しなくてははいけません。ジェンダーなどは典型的ですが、公正と多様性の双方を追求しなくてははいけないのです。そういう内部矛盾みたいなものや、SDGsが達成したら本当に良い世の中になるのかといったことなど、大学である以上、そういった批判的な感覚もつねに忘れないようにしたいものです。